

2025年8月27日(水)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-04]

幼児期における体組成と身体活動との関係（発,測）

運動遊び推進園と一般園との比較

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-05]

幼児期における体力・運動能力の発達パターンの違いが非認知能力の形成に与える影響（発,測）

3年間の縦断的検討

*小椋 優作¹、春日 晃章²、大坪 健太³ (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学、3. 岐阜協立大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-06]

幼児を対象としたサッカーキッズプログラムにおけるメニューごとの身体活動量について（発）

*廣木 武士^{1,2}、黒川 優介²、鈴木 宏哉² (1. 横浜YMCAスポーツ専門学校、2. 順天堂大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01]

高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02]

未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）

運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03]

幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01]

第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開（史,社）

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02]

エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究（哲）

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-03]

スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）

共起ネットワークによる関与人物の検討

*山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-04]

日本におけるスケートボードの初期的展開に関する検討（史）

スケートボードパークの諸相に着目して

*塩見 俊一¹ (1. 立命館大学非常勤講師)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-05]

参加者が楽しいと感じるゆるスポーツの競技特性（リハビリテーション科学）

インクルーシブスポーツの設計を目指して

*篠永 篤志^{1,2}、小野 晃路^{1,2,3}、澤村 彰吾^{1,2,4}、瀧 慎伍^{1,2,3}、田中 亮^{1,2,3}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,3}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 広島大学スポーツセンター、4. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-06]

スポーツに対する肯定的評価に関連する要因の探索（生涯スポーツ）

ゆるスポーツ参加者の語りからの抽出

*小野 晃路^{1,2,4}、篠永 篤志^{1,2}、澤村 彰吾^{1,2,3}、瀧 慎伍^{1,2,4}、田中 亮^{1,2,4}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,4}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、4. 広島大学スポーツセンター、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

【1a1602-04】生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-01]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価①（経）

*水上 雅子¹、小野里 真弓²、江向 真理子³ (1. 杉野服飾大学、2. 尚美学園大学、3. 鶴ヶ島市スポーツ少年団)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-02]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価②（経）

*江向 真理子¹、小野里 真弓²、水上 雅子³ (1. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、2. 尚美学園大学、3. 杉野服飾大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-03]

地域スポーツ推進をめぐる中間支援組織の機能に関する事例研究（経）

広域スポーツセンター事業縮小後の現状と課題

*菅谷 美沙都¹ (1. 上武大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

【1a1702-04】生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04]

親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05]

成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発,測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜市立大学附属病院 児童精神科)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-06]

Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon（発,測）

A Randomized Controlled Trial

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育总局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

🌱 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-07]

スポーツの実施意向、職場での取組、参画状況がWell-beingに及ぼす影響に関する基礎的研究 (測,教,政)

「スポーツの実施状況等に関する世論調査」のデータを活用して

*中山 正剛^{1,2}、田原 亮二³ (1. スポーツ庁健康スポーツ課、2. 九州大学大学院人間環境学研究院、3. 西南学院大学人間科学部)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-08]

デジタル社会における大学生の社会的繋がりと主観的満足度の変容 (社)

中国の体育系大学生における探索的分析

*張 方舟¹、清宮 孝文¹、依田 充代¹ (1. 日本体育大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-09]

アダプテッド・スポーツの観点を地域の防災コミュニティ形成に活かす可能性に関する検討 (ア)

下馬・野沢×日大 防験 (防災体験) & スポーツフェスを通して

*近藤 克之¹ (1. 日本大学スポーツ科学部)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

🌱 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-01]

即時的フィードバックを用いたトレーニングの効果 (測,コ)

ジャンプに着目して

*塩多 雅矢¹ (1. 東京学芸大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-02]

EMSを用いた視覚改善機器の効果 (心,発,コ)

大学柔道部員を対象とした研究

*小林 咲里亜¹、青木 大¹、天野 勝弘² (1. 帝京科学大学、2. スポーツパフォーマンスデザイン)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-03]

上肢挙上位からの肩関節屈曲・伸展動作における体幹筋群への意識づけと姿勢安定性の関連について (コ)

量的及び質的観点からの検討

*遠藤 寛太¹、岩本 紗由美²、村田 宗紀²、二橋 元紀² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-04]

6秒1kp負荷全力ペダリングテストが評価する下肢能力の特性（コ）

*青木 ビクター達哉¹、後岡 直樹²、川村 卓³ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学人間総合科学研究科、3. 筑波大学体育系)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-05]

足袋型シューズの2ヶ月間の装着が瞬発力とアジリティに及ぼす効果（コ）

*天野 勝弘¹、森 克実²、田邊 真菜実³ (1. スポーツパフォーマンスデザイン、2. G5 sports、3. G5sports)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-06]

日常での草履サンダル着用が少年野球選手に与える影響（測,コ）

*宮口 和義¹、畠本 紗斗子²、坂口 雄介³、川端 健司³、宮口 貴義⁴ (1. 石川県立大学、2. 金沢工業大学、3. 北陸大学、4. 金沢大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-01]

競技会参加の目的とチームのあり方について（コ）

大学体操競技部における例をもとに

*松山 尚道¹ (1. 天理大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-02]

スポーツチームで実施するメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発（心）

スポーツ現場へのメンタルヘルス教育導入に向けて

*小塩 靖崇^{1,2} (1. 国立精神・神経医療研究センター、2. 東京大学大学院総合文化研究科)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-03]

チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討（哲）

*大友 一樹¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

【1a601-03】競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-04]

福岡県タレント発掘事業における運営システムの構築（政）
事業運営者の動向を中心に

*井上 雄貴¹ (1. 日本体育大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-05]

小中学生期を対象とするタレント発掘・育成事業における育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（アスリート育成パスウェイ）
福岡県及び山口県の事例から

*白井 克佳^{1,2}、山下 修平^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、原村 未来³、山口 真未^{1,2}、萩原 正大^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-06]

スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（社, コ, 政）
シンガポールにおける事業の品質管理とリスク管理の事例から

*小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、山下 修平^{1,2}、原村 未来³、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

【1a702-04】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-01]

「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異（教）

*中村 有希^{1,2}、梅澤 秋久³ (1. 九州共立大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 横浜国立大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-02]

インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教, ア）

*萩原 大河¹ (1. 姫路市立水上小学校)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-03]

文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業におけるCulturally Responsive Teachingに関するシステマティック・レビュー（教）

*戸村 貴史¹ (1. 福山大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04]

クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)

中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*斉藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05]

長距離走のICTを活用した集团的競争教材試案 (教)

チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06]

高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究 (発, 測, 教)

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか

かに貢献できるか

■ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 ■ 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-01]

エージェンシー概念の実践化プロセスの解明 (教, 政)

中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*草津 晃平¹ (1. 唐津市立伊岐佐小学校)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-02]

定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果 (教)

*五十川 利心¹、浜上 洋平²、栗田 昇平² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-03]

共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究 (ア)

*綿引 清勝^{1,2} (1. 東海大学児童教育学部、2. 明星大学大学院教育学研究科)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-04]

幼児期における体組成と身体活動との関係（発,測）

運動遊び推進園と一般園との比較

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-05]

幼児期における体力・運動能力の発達パターンの違いが非認知能力の形成に与える影響（発,測）

3年間の縦断的検討

*小椋 優作¹、春日 晃章²、大坪 健太³ (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学、3. 岐阜協立大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-06]

幼児を対象としたサッカーキッズプログラムにおけるメニューごとの身体活動量について（発）

*廣木 武士^{1,2}、黒川 優介²、鈴木 宏哉² (1. 横浜YMCAスポーツ専門学校、2. 順天堂大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-04] 幼児期における体組成と身体活動との関係（発,測）
運動遊び推進園と一般園との比較

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

本研究は、就学前施設における身体活動に関わる取り組みと幼児の体組成との関係について明らかにすることを目的とした。対象は5歳児793名（男児397名、女児396名）であった。調査項目は、体格項目として、身長と体重、BMIの3項目。また体組成の測定には体組成成分分析装置（In Body270）を用いて体脂肪量（FM）と除脂肪量（FFM）を測定し、体脂肪率（%FM）、体脂肪量指数（FMI）および除脂肪量指数（FFMI）を算出した。分析に際して、誕生月と測定月を用いて測定時年齢を算出した。運動遊び推進園と一般的な保育・教育を行う就学前施設（一般園）における体格および体組成の差を検討するために、性別に体格3項目および体組成5項目についても検定を行った。分析の結果、身長とBMIにおいて、男女ともに有意な差が認められ、一般園より運動遊び推進園の方が、身長は高くBMIが低い値を示した。また体組成5項目において、男女ともに有意な差が認められ、一般園より運動遊び推進園の方が、FMは低くFFMが高い値を示した。また%FMとFMI、FFMIにおいて有意な差が示され、一般園より運動遊び推進園の方が、%FMおよびFMIは低くFFMIが高い値を示した。これらの結果から、就学前施設における身体活動に関わる取り組みが体組成の発育に影響しており、運動遊び推進園の幼児は一般園の幼児と比較して、脂肪が少なく筋肉が多い体組成の特性を有していることが示唆された。また測定時の年齢は、男児は運動遊び推進園より一般園の方が高く、女児は有意な差が認められなかった。また、身長は男女ともに運動遊び推進園の方が有意に高い値を示したことから、幼児期における身体活動は長育にも影響を与える可能性が推察された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-05] 幼児期における体力・運動能力の発達パターンの違いが非認知能力の形成に与える影響（発,測）

3年間の縦断的検討

*小椋 優作¹、春日 晃章²、大坪 健太³ (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学、3. 岐阜協立大学)

本研究の目的は、年少時から年長時までの縦断的データを用い、体力・運動能力の発達パターンの違いが、非認知能力の形成にどのような影響を及ぼすかを検討することである。対象は、年少時および年長時に、7項目からなる幼児用体力テストおよび7要素・16設問からなる非認知スキル測定を実施した559名（男子279名、女子280名）であった。体力テストの結果から、主成分分析により第一主成分得点を算出し、性別および年齢別（0.5歳区分）でTスコア化した体力総合得点を指標とした。非認知能力測定は担任保育者による5段階評価（平均的な幼児を3とする）を行い、各要素における設問の評価を平均値化し、各要素の非認知能力得点とした。その後、体力総合得点（Tスコア）に基づき、年少時に50未満→年長時に55以上となった「相対的向上群（17名）」と、年少時に55以上→年長時に50未満となった「相対的低下群（24名）」に分類し、各要素の非認知能力得点の経年変化について検討した。分析には、一要因（学年）のみ対応のある二要因（学年×群）の分散分析を用いた。分析の結果、学年間に主効果が認められたのは、意欲得点、自制心得点、および回復力&対処能力得点であり、いずれも年少時より年長時の得点が高かった。群間に主効果が認められたのは、忍耐力得点と創造性得点であり、いずれも相対的向上群の得点が相対的低下群より低かった。また交互作用はどの項目においても認められなかったが、相対的向上群は相対的低下群よりも、年少時から年長時にかけて非認知能力が発達している傾向がみられる項目もあった。以上の結果より、年齢の上昇に伴って非認知能力が向上する傾向が見られる一方で、体力・運動能力の発達パターンによっては大きな違いは見られないことが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[1a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表②

座長:大塚 光雄(日本体育大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-06] 幼児を対象としたサッカーキッズプログラムにおけるメニューごとの身体活動量について（発）

*廣木 武士^{1,2}、黒川 優介²、鈴木 宏哉² (1. 横浜YMCAスポーツ専門学校、2. 順天堂大学)

幼児期の身体活動について、中高強度身体活動（MVPA）を含む身体活動と多様な基本動作を行うことが重要である。これらを経験するプログラムとして、日本サッカー協会が推奨するサッカーキッズプログラム（以下、SKP）がある。SKPのプログラムにおいては、量的（MVPAの発現量）、また、質的（基本動作の発現）に分析を行ないSKPの特徴を明らかにした報告がある。本研究では、実施されているメニューの活動強度および基本動作の観点から各メニューをプロファイルし、SKP遊びmapを作成することを念頭に、事例的に実際にSKPを行った際に用いたメニューの活動強度に着目し分析を行うこととした。本研究の目的は、SKPで実施したメニューごとの活動強度の特徴について明らかにすることである。対象は、年長児12名（男児6名、女児6名）で、ロングパイル人工芝のサッカー場を縦約30 m、横約25 mに区切りSKPを実施した。SKPの内容は鬼ごっこ、ボール投げ上げ・キャッチ、リレー、サーキット、動き作り、ゲーム（4分程度を3回実施）とした。活動強度は身体活動量計を用いて計測し、幼児用のMETsに変換したうえで、3 METs 以上をMVPAとし、各メニューの活動強度（平均、最大値、最小値）、メニュー実施時間に占めるMVPAの割合を算出した。その結果、平均MVPAが最も高かったメニューは鬼ごっこ（ 4.1 ± 0.7 METs）で次にゲーム（ 4.0 ± 0.5 METs）であった。それぞれの最大MVPAの平均は、鬼ごっこが 8.7 ± 1.7 METs、ゲームが 7.7 ± 2.1 METsであった。メニュー実施時間に占めるMVPAの割合は、ゲームが71.3%であった。本結果から、今回実施したメニューでは、ゲームでは最大MVPAでは他のメニューよりも低値である一方、MVPAの占める割合が多く、MVPAの確保ができるメニューであることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01]

高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02]

未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）

運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03]

幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛一² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:30 ~ 15:50

[健康福祉-B-01] 高校までの運動部活動・スポーツクラブの活動経験がPhysical Literacyの身体的領域に及ぼす影響（発,測）

*小坪 朋夏¹、春日 晃章² (1. 岐阜大学大学院、2. 岐阜大学)

本研究は、高校までの運動部活動・スポーツクラブ（SC）の活動経験がPhysical Literacy（PL）の身体的領域に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

対象は、G県の公立高等学校に通う男子407名、女子303名とした。PLの測定は、日本版PL評価法を使用した。質問紙は、身体的領域13項目で構成され、5件法で回答を得、得点化した。運動部活動・SCの活動経験は、中学及び高校の部活動・クラブ活動について、個人競技、集団競技、芸術、無所属で回答を得、中学・高校ともに個人競技の群を「個人群」、集団競技の群を「集団群」、芸術及び無所属の群を「非運動部群」の3群に区分し分析に用いた。本研究では、中学・高校期に異なる種類の部活動に所属している生徒は対象から除いた。性別及び運動部活動・SCの活動経験の違いによるPLの差を検討するため、対応のない二要因分散分析を適用した。また、有意な主効果が認められた場合には、多重比較検定を行うとともに効果量を算出した。

分析の結果、全身持久力、スピードに関する設問において有意な交互作用が認められた。多重比較検定の結果、両設問とも、男子では、個人群が非運動部群より、集団群が個人群、非運動部群より有意に高かった。女子では、個人群、集団群が非運動部群より有意に高かった。集団群では、男子が女子より有意に高かった。運動部活動・SCに関して、身体的なリズム感に関する設問以外の設問において有意な主効果が認められた。多重比較検定の結果、およそ全ての設問において、個人群、集団群が非運動部群より有意に高かった。また、6項目において、集団群が個人群より有意に高かった。中高生期に継続して運動部活動・SCに所属している生徒は、そうでない生徒よりも高い身体能力を有すると推測され、競技に求められる運動能力によって、得意とする体力特性に違いがあると考えられる。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

15:50 ~ 16:10

[健康福祉-B-02] 未就学児から学童期までの運動プログラムの開発（発,測,コ）
運動観察記述法に着目して

*藪内 正樹¹ (1. C3pro株式会社 Happy Core Smile)

現在、未就学児から学童期までの運動プログラムやトレーニング法の開発が様々に展開されているが定型発達にこだわりすぎるという問題点がある。そのため発達の個人差が十分に考慮されず、できる・できないの二分法的な評価になりやすく、特別支援が必要な子供たちへの配慮が不十分なものとなる傾向があり、その結果、子供達自身の主体性や創造性が抑制的に捉えられ、指導者の視野が狭くなるなどという問題点が一般的に指摘されている。

本研究では、自立するまでの動き、その後の匍匐、つかまり立ちや自立歩行などの移動の動き、体幹の動き、四肢や頭部の動きとの連動性に注目し、この動きを豊かにすることを狙いとした運動観察と指導の在り方を考察する。そこに注目する理由は、その後の発達のための基礎ないしは背景に気づき、発達支援の取り組みもたえずこの点に立ち戻りつつ進められなくてはならないと考えたからである。筆者らの取り組みは、「今できる体幹・四肢・頭部の動き」に着目し、その組み合わせやバリエーションを楽しみ広げることによって（分化と再生）、からだの面だけではなく非認知能力を含むこころの面の発達の現在値を豊かにする、質の高い運動環境の提供をねらいとしている。こどもたちの多様な移動運動（手足のクロールリング、はいはい、ずりばい、つかまり立ち、左右支持足の交代、歩動作、など）に着目し、1. 体幹の動きを中心とした、四肢・頭部の動きとの連動性をたかめる協調運動の観察評価、2. 主動作に対する準備的な導出動作（反動動作）の機能性をたかめる協調運動の観察評価、3. 動作の緊張と弛緩の流れや調和をたかめる協調運動の観察評価を提案する。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[1a1105-07] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表①

座長:田中 千晶(東京家政学院大学)

16:10 ~ 16:30

[健康福祉-B-03] 幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響（発）

*秋武 寛¹、三村 寛一² (1. 西南学院大学 人間科学部 児童教育学科、2. 滋慶医療科学大学 医療管理学研究科)

【背景】幼児の扁平足と運動能力との関係において扁平足の幼児は、運動能力が低いとする報告もあれば、両者に関係は認められなかったとする報告もある。しかしながら幼児の身体活動量が、足部舟状骨高に及ぼす影響について明らかにされていない。【目的】本研究は、幼児の日常の身体活動量が足部舟状骨高に及ぼす影響について検討することを目的とした。【方法】対象は、4歳から5歳の幼児74名(男児32名、女児42名)であった。日常の身体活動量の測定は、3軸方向の加速度計であるActiGraph wGT3X-BT (4.6×3.3×1.5cm, 19g) を用いた。加速度計は、入浴、水泳を除いて右腰部に装着して専用のベルトに固定し24時間一週間連続して測定した。日常の身体活動量は、先行研究を基に歩数（以下SC）、座位行動、低強度身体活動、中強度身体活動（以下MPA）、中高強度身体活動（以下MVPA）、高強度身体活動を分析した。足部形状の測定は、三次元足形計測装置INFOOT 2を用いて測定した。INFOOT 2は、ヒトの足の形状とその解剖学的寸法を計測する光学三次元計測機器であった。対象には、足部の解剖学的計測点に基づき、舟状骨下端に測定機器の製造会社が推奨している直径5mmのランドマークを貼付した。左右対称性指数は、Symmetry index (SI)として算出した。SI=（右足舟状骨高-左足舟状骨高）/（右足舟状骨高+左足舟状骨高×0.5）【結果および考察】日常の身体活動量は、足部舟状骨高に関係が認められなかった。しかしながら平日の歩数、全日および平日のMPA、全日のおよび平日のMVPAは、足部舟状骨高の左右差に負の相関関係が認められた($p<0.05-0.01$)。以上のことより、幼児の日常の身体活動量は、足部舟状骨高の左右差が小さくなる可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01]

第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開（史,社）

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02]

エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究（哲）

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-03]

スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）

共起ネットワークによる関与人物の検討

*山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01] 第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開 (史,社)

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

本研究は、1988年第24回オリンピック競技大会の名古屋市による招致活動（以下、名古屋招致）に対する市民運動の展開について取り上げる。名古屋招致に関する研究では名古屋招致の敗因を問うことが主題となり、その中で名古屋招致に対する市民の反対運動の存在が言及されている。このように市民による運動は、名古屋招致の反対運動として評価されている一方で、名古屋市政に対する市民運動であるという側面については、十分に検討がされてきていない。

そこで本研究では、①当該期の名古屋市政と名古屋招致の関係を整理すること、②名古屋招致に対する市民運動を展開した複数の団体の論理と活動の分析を行うことで、名古屋招致をめぐる名古屋市政と市民運動の関係について明らかにする。

1977年8月に愛知県知事の仲谷義明がオリンピック招致構想を明らかにして以降、名古屋招致は中部圏の政財界によって検討が進められていく。こうした状況に市民の中には名古屋招致に関する検討が「市民の不在」のまま進んでいると訴えて、市民に対する情報公開や意思決定の参画を求める市民団体が登場する。いくつかの団体による活動は「名古屋オリンピックを考える市民連絡会議」の結成へとつながり、名古屋招致に対する市民運動の展開が本格化していくのである。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02] エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究 (哲)

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

本研究は、エコロジカル・アプローチに基づき提示する体育授業における評価方法を、エコロジカル・アプローチの思想的基盤から考察することを試みるものである。エコロジカル・アプローチの観点から体育における〈できる〉を捉えると、それは身体と環境のマッチングとしてのケイパビリティである。そのため、学習者の〈できる〉は、学習者が環境に合わせて自らの身体能力を変えるだけでなく、環境を変えることによって開発することが可能であり、学習者が〈できる〉を生み出すために、自らの身体能力にマッチした環境をどのように改変するのかという、環境を変える創造性という評価基準を新たに提示することができる。本研究では、このような創造性をどのように評価することができるのかについて、エコロジカル・アプローチの思想的基盤として位置づけることができる、メルロ＝ポンティの現象学的身体論から考察を行った。メルロ＝ポンティによれば、行動はその構造に応じて「癒合的形態」「可換的形態」「象徴的形態」に分類でき、特に「象徴的形態」は人間に特有の行動の形態であり、同一の主題を様々な表現することができるパースペクティブの多様性を持つ。例えば体育の逆上がりでは、一見すると補助器具としての役割を持たない用具を補助器具として捉えたり、後ろ向きの回転という同一の主題を跳び箱の上やマットの上など様々な環境で表現したりできることが象徴的形態であると考えられる。体育の目的・目標は「ヒトの身体面からの人間化」であり、このことをメルロ＝ポンティの行動の形態を基に捉えるならば、それは行動の形態が象徴的形態へと移ったときであるといえる。そのため、体育授業における環境を改変する創造性は、環境の観点から見たときに身体能力をどのように機能させることができるのか、というパースペクティブを変えること・パースペクティブの多様性によって評価可能になると考えられる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

16:10 ~ 16:30

**[スポーツ文化-B-03] スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）
共起ネットワークによる関与人物の検討***山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

ライフスキル（LS）は「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」（WHO, 1997）である。スポーツを通じたLS形成では環境、とりわけ指導者の影響が大きいとされるが、LSは複合的概念であり、LS教育では重点スキルを絞った方が効果的と指摘されている。したがって、LSを構成する各要素ごとに形成へ寄与する人物を把握することが不可欠であるが、現状では十分に検討されていない。本研究は、LSの構成要素別に、その形成に寄与する人物を同定することを目的とした。関西のスポーツ系大学に在籍する学生アスリート180名（男性105名・女性75名、 19.73 ± 0.54 歳）を対象に、2020年10月に第1段階調査として大学生アスリート用ライフスキル評価尺度（島本ほか，2013）の回答を得た。続く2020年11月～2021年2月には第2段階調査として、同尺度が想定する10因子（ストレスマネジメント、目標設定、考える力、感謝する心、コミュニケーション、礼儀・マナー、最善の努力、責任ある行動、謙虚な心、体調管理）に関する具体的エピソードを自由記述形式で収集した。両調査はいずれもオンラインで実施した。得られたテキストをKH Coderで形態素解析し、出現回数20以上かつJaccard係数0.1以上を条件に因子別の共起ネットワーク分析を実施した。分析の結果、個人内スキル（目標設定、最善の努力、ストレスマネジメント、体調管理、考える力、謙虚な心）は「指導者」と強く共起し、対人スキル（コミュニケーション、礼儀・マナー、感謝する心、責任ある行動）は「チームメイト」「友人」「先輩」と結び付いた。以上より、スポーツを通じたLS教育では、個人内スキルには指導者による明示的指導を、対人スキルにはピア学習や集団活動の設計を重視することが効果的であることが示唆された。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-04]

日本におけるスケートボードの初期的展開に関する検討（史）

スケートボードパークの諸相に着目して

*塩見 俊一¹ (1. 立命館大学非常勤講師)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-05]

参加者が楽しいと感じるゆるスポーツの競技特性（リハビリテーション科学）

インクルーシブスポーツの設計を目指して

*篠永 篤志^{1,2}、小野 晃路^{1,2,3}、澤村 彰吾^{1,2,4}、瀧 慎伍^{1,2,3}、田中 亮^{1,2,3}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,3}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 広島大学スポーツセンター、4. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-06]

スポーツに対する肯定的評価に関連する要因の探索（生涯スポーツ）

ゆるスポーツ参加者の語りからの抽出

*小野 晃路^{1,2,4}、篠永 篤志^{1,2}、澤村 彰吾^{1,2,3}、瀧 慎伍^{1,2,4}、田中 亮^{1,2,4}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,4}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、4. 広島大学スポーツセンター、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:30 ~ 15:50

**[スポーツ文化-B-04] 日本におけるスケートボードの初期的展開に関する検討
(史)**

スケートボードパークの諸相に着目して

*塩見 俊一¹ (1. 立命館大学非常勤講師)

本発表の目的は、日本におけるスケートボードの1970年代から80年代初頭の展開について、同時期のスケートボードパーク(以下、パーク)の様相を踏まえて検討することにある。今日、スケートボードは五輪等での実施を含め注目を集め、研究も一定蓄積している。イアン・ボーデンはスケートボード文化研究において、1970年代の日本のスケートボードシーンが「非常に特徴的」だと指摘しているが、これまでの研究状況を概観すると、この点は十分には明らかにされてこなかった。この、いわば日本のスケートボード文化の根元を確かめることは、スケートボードを含むライフスタイルスポーツへの理解や考察の進展に資する可能性があるだろう。このような視点から、発表者はこれまで日本におけるスケートボード揺籃期について、サーフィンとの関わりや統括組織のあり方とその変化、またビジネス化やそれを目指すステークホルダーの諸関係などを検討し、当該時期のスケートボード文化の実相に迫ることを試みてきた。

本発表ではこれらの点を踏まえたうえで、当該時期のパークに関わる状況という側面に着目する。当時のパークとしては太東スケートボードセンター(現千葉県大東市)などが挙げられるが、少なくとも70年代後半には、都市部や郊外などにおいて、様々な背景や形態によって複数のパークやそれに類するものが設置、運営された形跡がある。そしてそこには当時のアメリカのスケートシーンや日本のレジャーを取り巻く状況などからの影響を含め、日本におけるスケートボード文化の性格との連関が垣間見られる。本発表ではとりわけ、管見の限りでは十全には注目されていない同時代の関西地区のパークに目を配り、当該時期の資料等から実態を明らかにすることを通じ、日本のスケートボード史の豊富化を目指す。なお各事例の詳細等については当日の発表で述べる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

【1a1402-04】スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-05] 参加者が楽しいと感じるゆるスポーツの競技特性（リハビリテーション科学）

インクルーシブスポーツの設計を目指して

*篠永 篤志^{1,2}、小野 晃路^{1,2,3}、澤村 彰吾^{1,2,4}、瀧 慎伍^{1,2,3}、田中 亮^{1,2,3}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,3}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 広島大学スポーツセンター、4. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

【はじめに】

運動能力や年齢、障がいの有無を問わず、多様な人が楽しめる“包摂的なスポーツ”を実現するには、楽しさや参加のしやすさを支える競技の特性を明らかにすることが重要である。こうした中、ユニークなルールや遊び心を取り入れた「ゆるスポーツ」は、誰もが参加しやすい競技として注目されている。しかし、その楽しさや参加のしやすさを生む競技特性については、十分に分析されていない。本研究は、ゆるスポーツを対象に、参加者が「楽しい」と感じる競技特性を明らかにし、インクルーシブなスポーツ設計に資する知見を得ることを目的とする。

【方法】

演者らが2024年12月に企画したゆるスポーツ体験会に参加し、アンケートの全項目に回答した24名を対象とした（午前10名、午後14名）。参加者には8種目（午前4種目、午後4種目）の競技を体験していただき、その後に「最も楽しかった」競技とその理由の回答を求めた。分析にあたっては生成AI（OpenAI-o3, OpenAI社）を用いて競技の特性をコード化し、午前と午後で「最も楽しかった」の回答頻度が多かった競技に共通する特性を探索した。

【結果】

「最も楽しかった」の回答頻度が多かった競技に共通する特性として、「チームワーク・協力」「戦略性・思考要素」「インクルーシブ性」「ユニークなルールによる意外性」の4点が抽出された。

【考察】

本調査で抽出された4つの特性は、運動能力や立場を問わず、誰もが主体的に参加し活躍を実感できる環境を生み出す鍵であると考えられる。一方で、限界点として①自由記述が簡潔で解釈に幅がある、②生成AIによる分析のため再現性に課題がある、③体験した競技がゆるスポーツ全体の一部であることが挙げられる。

【倫理的配慮】

本研究は広島大学大学院人間社会科学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した（HR-LPES-002326）。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[1a1402-04] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表②

座長:井村 祥子(東京都市大学)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-06] スポーツに対する肯定的評価に関連する要因の探索（生涯スポーツ）

ゆるスポーツ参加者の語りからの抽出

*小野 晃路^{1,2,4}、篠永 篤志^{1,2}、澤村 彰吾^{1,2,3}、瀧 慎伍^{1,2,4}、田中 亮^{1,2,4}、小木曾 航平^{1,5}、坂田 桐子^{1,2}、出口 達也^{1,2,4}、大池 真知子¹ (1. 広島大学D&I推進機構ダイバーシティ研究センター、2. 広島大学大学院人間社会科学研究科、3. 平成医療短期大学リハビリテーション学科、4. 広島大学スポーツセンター、5. 九州大学大学院人間環境学研究院)

【はじめに】

多様性を包摂するスポーツ、すなわち、だれでも参加できるインクルーシブなスポーツを展開するためには、参加者がスポーツを肯定的に評価する要因を明らかにすることが重要である。本研究では、だれもが楽しめる新スポーツと謳う「ゆるスポーツ」の体験談を手がかりに、スポーツに対する肯定的な評価に関わる要因を探索的に抽出することを目的とした。

【方法】

本研究では、健常成人8名を対象にスポーツの楽しさを主題に半構造化面接を実施し、その逐語録を質的に分析した。生成AI（OpenAI-o3、OpenAI社）を用いて逐語録から意味単位を抽出し、コード化した。その後、研究者が文脈に照らしてコード名の適切さを確認し、必要に応じて修正を加えた。さらに、再び生成AIを用いて8名分のコード名を統合した上で、その背後にある要因を探索した。

【結果】

分析の結果、「身体・認知の同時負荷による没入」、「成功体験を通じた自己効力感の生起」、「多様性を尊重した協働」、「好奇心をくすぐる仕組み」、「安全性の知覚」、「公平性を意識した設計」の6つの要因が抽出された。

【考察】

本研究では、従来示されてきた自己効力感や他者との協働に加え、身体運動と認知課題を同時に課すことで生じる没入が新たな要因となる可能性を示した。先行研究をふまえて、同時負荷による没入が劣等感や他者評価の不安を遮断し、技能差のある参加者間にも協働的な役割を促した結果、肯定的評価が形成された可能性がある。一方、本研究は生成AIを用いた分析であり、サンプルサイズも限られるため、再現性には課題が残る。今後はスポーツにおける包摂性の概念を定義し、本研究で抽出された要因の検証やスポーツの包摂性を測定する尺度開発へと発展させる必要がある。

【倫理的配慮】

本研究は広島大学大学院人間社会科学研究科倫理審査委員会の承認を得た後に実施した（HR-LPES-002326）。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-01]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価①（経）

*水上 雅子¹、小野里 真弓²、江向 真理子³ (1. 杉野服飾大学、2. 尚美学園大学、3. 鶴ヶ島市スポーツ少年団)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-02]

鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価②（経）

*江向 真理子¹、小野里 真弓²、水上 雅子³ (1. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、2. 尚美学園大学、3. 杉野服飾大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-03]

地域スポーツ推進をめぐる中間支援組織の機能に関する事例研究（経）

広域スポーツセンター事業縮小後の現状と課題

*菅谷 美沙都¹ (1. 上武大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30～16:30 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:30～15:50

[生涯スポーツ-A-01] 鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価①（経）

*水上 雅子¹、小野里 真弓²、江向 真理子³ (1. 杉野服飾大学、2. 尚美学園大学、3. 鶴ヶ島市スポーツ少年団)

本研究は、鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」がまちづくりの視点を踏まえた新たな地域スポーツ活動の試みとしてマネジメントを検討することを目的とする。モデル事業となる「チームつるがしま」は、令和6年4月に「埼玉県地域クラブ活動推進計画」が発表され、埼玉県鶴ヶ島市教育委員会生涯学習スポーツ課が、地域クラブ化支援モデル事業として準備を重ねてきた。活動の目標は、行政機関や他の中学校との連携、世代を超えた指導者や異種目との交流など、地域で子どものスポーツ活動を支え、関係した人々が、生きがいややりがいを感じることができることを目指すものである。実際の事業である「チームつるがしま」の初年度の対象種目は、市内全中学校に部が存在するバスケットボール、実施場所は市内の中学校で各回を持ち回り、1回3時間、男女各4回、参加費無料で実施した。指導者は、県立高等学校部活指導者、スポーツ少年団指導者があたった。本研究では、取り組みの初期段階として、活動内容が目標に向けて効果的・効率的に機能しているか、生徒たちのニーズや活動への期待、関連するステークホルダーからの支援計画など、今後のマネジメントプロセスに有効な評価方法を意識し、調査項目を設定した。具体的には、参加生徒の基本特性、スポーツ特性およびバスケットボール特性をはじめ、今回のモデル事業での活動に関する期待や活動に参加して感じたことなどの項目に対して5段階スケールで回答を求めた。調査は、活動の中心となる参加生徒を対象に初回の事業実施前と、最終回の事業実施後および参加生徒の保護者に対し、質問紙によるアンケート調査を実施した。本モデル事業の準備段階で計画していた鶴ヶ島市の目指すまちづくりや支える人々の生きがい・やりがいなどの調査は今後の継続的な課題となるが、実際の初期事業展開での今回の調査結果から、今後のマネジメントの重要な課題等が示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-02] 鶴ヶ島モデル「チームつるがしま」の初年度評価②（経）

*江向 真理子¹、小野里 真弓²、水上 雅子³ (1. 鶴ヶ島市スポーツ少年団、2. 尚美学園大学、3. 杉野服飾大学)

令和6年4月に「埼玉県地域クラブ活動推進計画」が発表され、鶴ヶ島市では教育委員会生涯学習スポーツ課を中心に「地域クラブ化支援モデル事業」を立ち上げた。この事業は、行政機関、学校や保護者に加えて、スポーツ少年団や地域クラブ、地域コミュニティ、県内の企業や高校、大学などが協力し活動することを目標としている。子ども達の心身の成長と可能性を伸ばし、スポーツ活動を充実させ、支える人達の喜びややりがい、生きがいにつなげ、市の新しいまちづくりにつなげることをコンセプトとし、鶴ヶ島市の環境、規模、地域特性などを生かした組織・運営体制、指導体制づくりを目指していることが特徴である。初年度は種目をバスケットボールとし、令和6年12月の土日の通常の部活動の活動時間帯で、1回3時間男女それぞれ4回実施された。市内全中学校バスケットボール部の1, 2年生を対象に募集し男子61% (37名) 女子83% (44名) から参加の申し込みがあった。場所は市内の中学校体育館で各回を持ち周りで行われた。本研究では、「チームつるがしま」に参加した生徒（事業実施前後）及びその保護者（事業後）を対象に行った調査の結果から、特に自由記述での回答に対しテキストマイニングを用いて分析し、活動内容の効果や成果を検証した。その結果、生徒の活動に対する評価については「できる」「楽しい」などの肯定的な言葉が多く出現しており、継続希望の理由として「向上」「学ぶ」など、技術や知識を身に着けたいという意欲的な言葉が出現していた。また、「話せる」「他校」などの他者との関わりやコミュニケーションに関する言葉が多いことも確認された。保護者や指導者からは、運営や環境についての問題点、行政機関での調整の問題などの意見が挙げられた。今後の取り組みに向けての新たな視点や重要な課題を活用し、今後のマネジメントシステムを改善・向上させることが重要であると考えられる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[1a1602-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:吉岡 尚美(東海大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-03] 地域スポーツ推進をめぐる中間支援組織の機能に関する事例研究（経）

広域スポーツセンター事業縮小後の現状と課題

*菅谷 美沙都¹ (1. 上武大学)

国は総合型地域スポーツクラブの創設を進めると同時に総合型地域スポーツクラブの育成支援の役割を担う中間支援組織として、平成11年度より各都道府県に広域スポーツセンターの設置をモデル事業として進めてきた。広域スポーツセンターは、総合型地域スポーツクラブの創設や活動を効率的に支援できる組織として期待が寄せられてきた。平成23年度に文部科学省により実施された広域スポーツセンターを対象とした調査では、全国47都道府県すべてに61の広域スポーツセンターが設置されていたことが報告されている。しかしながら同調査において、人員配置や財源確保といった広域スポーツセンターの組織運営に関する課題も浮き彫りになっており、事業の縮小化や組織体制の見直し等が既に叫ばれていた。加えて、広域スポーツセンターに関する国の実態調査はそれ以降実施されておらず、先行研究においても自治体における地域スポーツの振興にまつわる中間支援組織を対象とした研究は僅少である。

そこで本研究は、広域スポーツセンター事業の縮小化に至ったX県を事例として中間支援の実情を明らかにし、総合型地域スポーツクラブ育成支援を担う中間支援組織の役割を再度検討することを目的とした。分析視角として、櫻井（2024）が提示する中間支援の概念と機能に沿って事例の解釈を試みた。X県は、県スポーツ協会スポーツ振興センター内に広域スポーツセンターを設置していたが、スポーツ振興センターの閉鎖に伴い広域スポーツセンターは事実上形骸化し、その事業承継の一端として令和3年度に「地域スポーツ推進団体連絡会議」を国庫補助金によって組織した。クラブ現地調査やクラブ登録審査委員会事業等を実施し、会議体としてのインフラストラクチャー機能は一定の成果が見られたが、資金循環やクラブ創設支援については未だ課題が多いことが明らかになった。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04]

親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05]

成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発,測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜市立大学附属病院 児童精神科)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-06]

Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon（発,測）

A Randomized Controlled Trial

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-04] 親のフィジカルリテラシー4領域とスポーツ同一化が子どもの運動・スポーツ環境に与える影響への一考察（発,コ）

神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者を事例として

*木村 元彦¹、相澤 勝治¹、三須 亜希子¹、遠山 健太²、西垣 景太³、高谷 惣亮⁴、山口 香⁵ (1. 専修大学スポーツ研究所、2. 順天堂大学大学院スポーツ科学研究科、3. 東海大学健康学部健康マネジメント学科、4. 拓殖大学、5. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

【背景】近年、スポーツ活動の促進要因の1つとして「フィジカルリテラシー」が国内外で注目されている。我が国においては、第3期スポーツ基本計画の施策目標にフィジカルリテラシーが盛り込まれた。保護者のフィジカルリテラシーに着目した検討では、子どもの運動・スポーツ環境との関連性が示されている。さらに、自分の子どもと保護者自身とを重ね合わせる「スポーツ同一化」も子どものスポーツ活動に影響を与えていると考えられている。そこで本研究では、スポーツに取り組む子どもを持つ保護者のフィジカルリテラシーとスポーツ同一化に着目し、子どものスポーツ活動における保護者の役割について明らかにすることを目的とした。【方法】対象者は神奈川県タレント育成能力開発プログラムに参加している子を持つ保護者とした。調査項目は日本スポーツ協会が開発した身体、心理、社会、認知的の4領域に分類された「フィジカルリテラシー尺度」と、「スポーツ同一化尺度」(井梅ほか, 2017)を採用した。【結果および考察】「スポーツの自信の有無」からみたフィジカルリテラシーの比較では、身体的領域のみ得意群が有意に高かった。スポーツ同一化の比較では得意群が有意に高かった。「スポーツの嗜好性」からみたフィジカルリテラシーの比較では、4領域において得意群が有意に高かった。「子どもとのスポーツの会話頻度」からみた比較では、4領域すべてに有意な差は認められなかった。スポーツ同一化の比較では、よく話す群が有意に高かった。フィジカルリテラシーの4領域とスポーツ同一化との因子間では、社会的領域および認知的領域とスポーツ同一化は有意な負の相関関係を認めた。これらの結果から、保護者のフィジカルリテラシーはスポーツに対する自信や嗜好性と関連していた。保護者のフィジカルリテラシーおよびスポーツ同一化は子どものスポーツ環境に影響する要因の一つとなる可能性が示された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-05] 成人におけるPhysical Literacyと身体活動、QOLの関連（発、測）

*許 東海¹、松永 美咲²、Gao Yibo¹、松井 公宏^{3,4}、鈴木 宏哉^{1,2,3} (1. 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、2. 順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構、3. 順天堂大学スポーツ健康科学部、4. 横浜国立大学附属病院 児童精神科)

【背景】Physical Literacy (PL) とは、生涯にわたって身体活動や運動に取り組むための動機、自信、身体的能力、知識および理解である (IPLA, 2017)。近年、PLの醸成は身体活動習慣の獲得に貢献することが示唆されている。一方で、PLは身体活動習慣を介して、生活の質 (QOL) に関与する可能性が考えられるが、これらの関係は不明である。【目的】本研究では、成人を対象にPL、身体活動、および健康関連QOLの関係を明らかにすることを目的とした。【方法】本研究では、対象者はインターネット調査会社に登録している18歳から64歳までのモニターでから募集した。性・年齢ごとに均等割り付けを行い有効な回答が得られた成人男女940人を分析対象とした。日本語版 PL4L及び日本語版 WHOQOL-26 尺度を用いて PL および QOL を得点化した。PL4L は身体領域、感情領域、認知領域、社会領域の4領域から構成され、領域ごとの得点率とこれらを平均した PL 得点を算出した。身体活動は1週間あたりの身体活動時間(分)及び行動変容ステージを用いて評価した。統計解析には共分散構造分析を用い、PL、身体活動、QOLを潜在変数と仮定し、3変数間の関連性における標準化偏回帰係数 (β [95%信頼区間]) を算出した。【結果】モデルの適合度は良好であった (CMIN/DF= 6.336、RMSEA=0.075、CFI= 0.963、GFI=0.958、AGFI=0.928)。PLはQOLと直接的に関連していた ($\beta=0.332$ [0.196,0.439])。一方、PLは身体活動と関連しており ($\beta=0.598$ [0.481,0.731])、身体活動はQOLとも関連していた ($\beta=0.245$ [0.122,0.401])。【結論】成人において、PLはQOLに直接的および身体活動を介して関連することが示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[1a1702-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:内田 匡輔(東海大学)

16:10 ~ 16:30

**[生涯スポーツ-A-06] Effects of Differentiated Periodic Exercise Intervention on Glucose in T2D with Dawn Phenomenon (発,測)
A Randomized Controlled Trial**

*Gao Yibo^{1,2}、鈴木 宏哉²、Pan Xiang^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学大学院)

Background: The dawn phenomenon (DP), characterized by abnormal early-morning glucose fluctuations, poses a serious risk to individuals with T2D.

Methods: The 110 recruited individuals were randomized into three exercise groups and a control group. Each mini-cycle of 5 days was separated by 1 day (G1), 2 days (G2), 3 days (G3), and a control group (GC), respectively. Nine mini-cycles of intervention per exercise group.

Results: The final sample size was 85. Compared with baseline and GC, all three groups showed a decrease ($P < 0.01$). Differences between groups were also observed ($P < 0.01$). DP improved in cycles 7, 8, and 9. G1 exhibited the greatest change in cycle 3, peaking earlier and higher than G2 and G3. From T4 to T9, G1 showed a decreasing trend.

Conclusions: Periodic exercise effectively attenuates DP in T2D, with shorter intervals yielding earlier and greater glycemic improvements.

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-07]

スポーツの実施意向，職場での取組，参画状況がWell-beingに及ぼす影響に関する基礎的研究
(測,教,政)

「スポーツの実施状況等に関する世論調査」のデータを活用して

*中山 正剛^{1,2}、田原 亮二³ (1. スポーツ庁健康スポーツ課、2. 九州大学大学院人間環境学研究院、3. 西南学院大学人間科学部)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-08]

デジタル社会における大学生の社会的繋がりと主観的満足度の変容（社）

中国の体育系大学生における探索的分析

*張 方舟¹、清宮 孝文¹、依田 充代¹ (1. 日本体育大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-09]

アダプテッド・スポーツの観点を地域の防災コミュニティ形成に活かす可能性に関する検討
(ア)

下馬・野沢×日大 防験（防災体験）&スポーツフェスを通して

*近藤 克之¹ (1. 日本大学スポーツ科学部)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:30 ~ 15:50

[生涯スポーツ-A-07] スポーツの実施意向，職場での取組，参画状況がWell-beingに及ぼす影響に関する基礎的研究（測,教,政）

「スポーツの実施状況等に関する世論調査」のデータを活用して

*中山 正剛^{1,2}、田原 亮二³ (1. スポーツ庁健康スポーツ課、2. 九州大学大学院人間環境学研究院、3. 西南学院大学人間科学部)

本研究は、運動・スポーツが人々の幸福感および充実感といったWell-beingに及ぼす影響を明らかにするための基礎資料を得ることを目的とした。具体的には、「運動・スポーツの実施意向」、「職場における運動・スポーツ推進」、「スポーツの参画状況（する・みる・ささえる）」の三つの側面に焦点を当て、Well-beingとの関係性を検討した。なお、本研究では、「令和6年度スポーツの実施状況等に関する世論調査」（スポーツ庁，2025）の二次データを使用した。分析に用いた主な項目は、「幸福感、日常生活の充実感、スポーツ実施希望頻度、職場における運動・スポーツの取組、スポーツ参画状況」とした。なお、幸福感と日常生活の充実感を合わせた得点をWell-being得点として分析を行った。主な結果は以下の通り。

1. スポーツ実施頻度および実施希望頻度がともに週1日以上である群は、他群よりWell-being得点が有意に高い結果を示した。また、週1日以上実施できていない場合でも、実施希望頻度が週1日以上である群は週1日未満の群よりも有意に高い結果を示した。
 2. 職場における運動・スポーツの取組では、取組がない群が有意に低く、取組が1個の群よりも2個以上の取組がある群が有意に高い結果となった。
 3. スポーツ参画状況では、3つすべてに参画している群（するみるささえる群）が有意に高く、次に2つが重なっている群（するみる群、するささえる群等）、1つのみの群（するのみ群、みるのみ群等）、非参画群の順にWell-being得点が有意に低下する結果となった。
- これらの結果から、運動・スポーツの実施意向や職場での運動・スポーツの取組、スポーツの参画状況がWell-beingに影響を及ぼしている可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

15:50 ~ 16:10

[生涯スポーツ-A-08] デジタル社会における大学生の社会的繋がりと主観的満足度の変容 (社)

中国の体育系大学生における探索的分析

*張 方舟¹、清宮 孝文¹、依田 充代¹ (1. 日本体育大学)

【背景】近年、AI技術の急速な普及は「第四次産業革命」とも称され、教育・福祉・スポーツの現場にも浸透している。大学生の間でもAIツールの活用が広がる一方、その使用が主観的満足度や社会的つながりに与える影響は十分に解明されていない。ソーシャル・キャピタル (SC) の水準がAIの社会的受容や主観的満足度に関与することが示されており、AI利用自体が信頼構造を再構築する双方向的作用を持つとも指摘されている。さらに、経済成長 (GDP) と満足度が必ずしも連動しない「イースタリンのパラドックス」も近年中国で注目されており、AI時代においてSCの質が人々の幸福を左右する重要な要素となりつつある。

【目的】本研究では、中国の体育系大学生を対象に、SCを結合型・橋渡し型および認知的・構造的に類型化した上で、SC水準とAIツール活用、主観的満足度との関連性を分析し、SCがAIと主観的満足度の関係を媒介する経路を明らかにすることを目的とする。

【方法】中国の体育系大学生が所属する5大学を対象に質問紙調査を実施した。EFAおよびCFAによりSCの下位因子を抽出し、クラスター分析によりSCを3類に分類した。続いて、SC・AIツール活用・主観的満足度の相関分析と回帰分析を行い、ブートストラップ法を用いて媒介分析を実施した。

【結果】媒介分析の結果、低結合型SCは、AIツール活用がSCを通じて主観的満足度を有意に低下させる負の間接効果が確認された。高結合型SCを有する学生では、AI利用とSCの関連が有意に負であるものの、SCから主観的満足度への効果が有意に正の効果を示した。また、橋渡し型SCに媒介効果は認められなかった。今後は、市民参加型のデジタル技術プラットフォーム (ビッグデータ) におけるデジタル公共圏の形成に関する可能性を検討する必要がある、縦断分析の併用も今後の課題となる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[1a1802-04] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 美吏(武庫川女子大学)

16:10 ~ 16:30

[生涯スポーツ-A-09] アダプテッド・スポーツの観点を地域の防災コミュニティ形成に活かす可能性に関する検討（ア）

下馬・野沢×日大 防験（防災体験）&スポーツフェスを通して

*近藤 克之¹ (1. 日本大学スポーツ科学部)

N大学Sキャンパスには、危機管理学部とスポーツ科学部があり、それぞれの学部の特徴を活かした地域連携事業を展開している。その一環として危機管理学部Aゼミは、学生が町の防災を考え、実際に町歩きを行うという一連の企画を立ち上げ実践することにより、幅広い年代の住民との触れ合いのノウハウを学んだり、実学としての防災に対する企画力が醸成されるような活動を行ってきた。2023年度、AゼミではSキャンパスのあるU地区において学生が企画した防災ツアーを行った。一方でスポーツ科学部Bゼミでは、世田谷区を中心として、多様な人々が一つのスポーツに参加できるアダプテッド・スポーツの特色を生かした取り組みを行ってきた。

今回、両学部協働によるアプローチを用いて、地域住民の防災意識を高めることと、平時の地域コミュニティをスポーツによって活性化させることを目指した「防験（防災体験）&スポーツフェス」を行った結果を分析し、アダプテッド・スポーツの射程の広がりに関する議論を行うことを目的として本発表を行う。

本研究では、参加学生ならびに参加者に対するインタビューを実施し、参加学生と参加者の発話内容を用いた質的な分析方法を用いた。

参加学生の発話内容からは、事前検討していた以上に、紙風船バレーボールの実施が、参加者同士のコミュニケーションを活発化させていた様子を捉えることができた。参加者からも、紙風船を作成する過程から、どのようにしたら上手く作成できるかなど、参加者同士で会話が弾み、実施に行った紙風船バレーボールでも協力しながら楽しめた様子がうかがえた。

これらのことから、アダプテッド・スポーツの観点をを用いた地域コミュニティ形成を考える上では、スポーツをお互いにつくりあげながら実施するという内容が含まれることが効果的であると考えられた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-01]

即時的フィードバックを用いたトレーニングの効果（測,コ）
ジャンプに着目して

*塩多 雅矢¹ (1. 東京学芸大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-02]

EMSを用いた視覚改善機器の効果（心,発,コ）
大学柔道部員を対象とした研究

*小林 咲里亜¹、青木 大¹、天野 勝弘² (1. 帝京科学大学、2. スポーツパフォーマンスデザイン)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-03]

上肢挙上位からの肩関節屈曲・伸展動作における体幹筋群への意識づけと姿勢安定性の関連について（コ）
量的及び質的観点からの検討

*遠藤 寛太¹、岩本 紗由美²、村田 宗紀²、二橋 元紀² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-01] 即時的フィードバックを用いたトレーニングの効果（測,コ）
ジャンプに着目して*塩多 雅矢¹ (1. 東京学芸大学)

〔諸言〕 学校体育におけるICT活用のねらい1つはフィードバックであろう。本研究の目的は、ジャンプトレーニング中のジャンプの質を即時的にフィードバックを与えることによるパフォーマンスの向上、またトレーニングの取り組みに与える内面的な効果を検証することである。

〔方法〕 36名の中学生野球部員の垂直跳びの高さを計測し(Enode、S&C corporation製)、フィードバック群(以下、FB群)とコントロール群(以下、CON群)に分類した。トレーニングはスクワットジャンプを10回×4セットを週に3回、8週間に渡って実施した。FB群はジャンプマット(BPAT Jump、スポーツセンシング社製)上で各ジャンプをモニタリングし、自由記述でのアンケートで実施に対する内省の調査をした。トレーニング前後の測定を実施できた31名のデータを分析対象とした。

〔結果〕 トレーニング前後の垂直跳び高は、FB群では 42.3 ± 6.0 cmから 42.0 ± 7.0 cm、CON群では 40.8 ± 9.3 cmから 40.5 ± 7.8 cmであり、有意な差は見られなかった。アンケートでは「マットから出てしまうことが難しかった」、「跳んでいるうちに、今はどんどん高くなっているからこの調子で跳ぼうや、低くなっているから頑張って高くしようと考えたことが良かった」、「最初の頃よりもジャンプ力が上がっていることが実感できて良かった」などが挙げられた。

〔考察〕 本研究においてジャンプ力が向上しなかったことは、トレーニング量が不十分だったためと考えられる。また、「マットから出てしまうことが難しかった」という部員の意見から、ジャンプ時に全力で跳ぶことよりも、その場で跳ぶことが優先され、それがジャンプ力を伸ばす刺激として不十分だったとも考えられる。一方で、即時的なフィードバックは、部員たち取り組みにおいては促進因子となっていた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-02] EMSを用いた視覚改善機器の効果（心,発,コ）

大学柔道部員を対象とした研究

*小林 咲里亜¹、青木 大¹、天野 勝弘² (1. 帝京科学大学、2. スポーツパフォーマンスデザイン)

本文 私たちの生活において視力は重要であるが日本人の眼鏡等使用率は57%に及ぶ。スポーツ競技でも視力は重要な要素であるが、なんらかの視力矯正手段を用いている選手の割合は35%に及んでいる（コンタクトが最も多い：約32%）。そこで本研究では、水晶体を調整する毛様体筋にEMS技術を用いて刺激を与えることで視力を改善させる装置の視力改善効果について検証した。使用した機器はアイトレ（It's wonderful社）であった（以後IT）。被検者には座位にてIT刺激を15分間行った。刺激強度は耐えうる刺激のやや手間であり、決定は被検者に委ねた。IT前後で静的視力、フリッカー検査、動体視力検査を実施した。動体視力は複数物体追跡システム（MOT）により評価した。視力については測定後1週間の継続検査も実施した。被検者は大学柔道部員17名（男子13、女子4）であった。視力はIT前は右目 0.34 ± 0.27 、左目 0.32 ± 0.21 であった。IT後は右目 0.40 ± 0.28 、左目 0.35 ± 0.20 であり、左目で有意に改善していた。フリッカー値はIT前は 34.1 ± 3.4 であった。IT後は 37.6 ± 3.4 であり有意に向上していた。動体視力はIT前は 308 ± 22 であった。IT後は 332 ± 45 であったが有意な向上ではなかった。ITの効果持続性を検討するため施術後2日ごとに8日目まで視力検査を実施した。その結果、右目はIT前 0.34 ± 0.27 、IT後 0.40 ± 0.28 、8日後 0.39 ± 0.29 であった。左目はIT前 0.32 ± 0.21 、IT後 0.35 ± 0.20 、8日後 0.36 ± 0.25 であり、効果の持続傾向が認められた。以上のことからITは、競技者の視力向上に効果が期待できると考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[1a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表①

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-03] 上肢挙上位からの肩関節屈曲・伸展動作における体幹筋群への意識づけと姿勢安定性の関連について (コ)

量的及び質的観点からの検討

*遠藤 寛太¹、岩本 紗由美²、村田 宗紀²、二橋 元紀² (1. 東洋大学大学院、2. 東洋大学)

【背景】多くのスポーツ動作において、体幹筋群の随意的収縮が姿勢安定に寄与していること報告されている。しかし、実際の指導現場では動作中の体幹筋群に対する意識づけ指導の難しさも垣間見られ、指導に対する受け手側の理解がどのように姿勢安定化に結び付いているかは不明な点も多い。そこで、本研究では肩関節屈曲・伸展動作時における体幹筋群への意識づけと動作姿勢保持との関連性を量的並びに質的観点より明らかにすることを目的とした。【方法】対象はトレーニング歴2年未満の健康男性8名とした。膝立位で上肢挙上位から肩関節屈曲90°までのチューブ抵抗下の肩関節伸展・屈曲運動（反復10回）を、体幹筋群への意識づけ有無による2条件下で実施させた。体幹筋群として内腹斜筋、外腹斜筋・脊柱起立筋から表面筋電図を記録し、動作時の筋活動量を最大随意収縮（MVC）で除し、標準化した。併せて、デジタルカメラで体幹に貼付したマーカーを撮影し、Frame-DIASを用いて矢状面上の体幹傾斜角、骨盤傾斜角、胸椎角、腰椎角の平均角度と総角変位を算出した。2条件下における各指標の変化及び関連性を量的に評価するとともに、2条件下での被験者の内省を聴取した。【結果】内腹斜筋の筋活動量は意識づけ条件により有意に増加した（ $p < 0.001$ ）。各角度平均には条件間で有意差は認められなかった。一方で、意識づけ条件では内腹斜筋の筋活動量と体幹傾斜角の総角変位に有意な相関が認められた（ $r = 0.57$, $p = 0.003$ ）。さらに、ネガティブな内省を持った被験者では、意識づけ条件においても内腹斜筋の筋活動量が低く、総角変位も大きい傾向にあった。【結論】姿勢安定化を目指した体幹筋群への意識づけ指導において、動作変化等の量的な変容のみに着目するのではなく、受け手側の内省も踏まえた意識づけにより、動作中の効果的な姿勢安定化につながる可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-04]

6秒1kp負荷全力ペダリングテストが評価する下肢能力の特性 (コ)

*青木 ビクター達哉¹、後岡 直樹²、川村 卓³ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学人間総合科学研究科、3. 筑波大学体育系)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-05]

足袋型シューズの2ヶ月間の装着が瞬発力とアジリティに及ぼす効果 (コ)

*天野 勝弘¹、森 克実²、田邊 真菜実³ (1. スポーツパフォーマンスデザイン、2. G5 sports、3. G5sports)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-06]

日常での草履サンダル着用が少年野球選手に与える影響 (測,コ)

*宮口 和義¹、畝本 紗斗子²、坂口 雄介³、川端 健司³、宮口 貴義⁴ (1. 石川県立大学、2. 金沢工業大学、3. 北陸大学、4. 金沢大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-A-04] 6秒1kp負荷全力ペダリングテストが評価する下肢能力の特性
(コ)

*青木 ビクター達哉¹、後岡 直樹²、川村 卓³ (1. 筑波大学大学院、2. 筑波大学人間総合科学研究科、3. 筑波大学体育系)

本研究は、1kp負荷での短時間全力ペダリングテスト (SC1kp) が評価する下肢能力の特性を、垂直跳び (CMJ) および等尺性最大筋力 (IMTP) との比較から明らかにすることを目的とした。男子大学生野球部員15名 (20.6±0.9歳) を対象に、SC1kp (最大回転数: PCad、平均パワー: AP)、CMJ、IMTPを測定し、ピアソンの積率相関係数により各指標間の関連を検討した ($p<0.05$)。

SC1kpのPCadは、CMJの複数の動的指標と有意な正の相関関係 ($r=0.562-0.816$) を示した。APも同様にCMJの動的指標群と有意な正の相関関係 ($r=0.529-0.787$) を示した。一方、PCadおよびAPはIMTP Peak Forceとは有意な相関を示さなかった。体重で正規化したAP/BWは、CMJおよびIMTPのいずれの指標とも有意な相関を認めなかった。体重はSC1kpの体重で正規化しなかった場合の結果と有意な正の相関関係を示し ($r=0.523-0.532$)、1kpという絶対負荷が体重の影響を受けることが示唆された。

これらの結果から、SC1kpは静的最大筋力とは独立した高速度域での動的パワー発揮能力を反映する評価指標であることが明らかとなった。体重正規化後のAP/BWが他の体力指標と相関しなかったことは、SC1kpが従来の評価法では捉えきれない独自の高速度運動能力や神経筋協調性を評価する可能性を示唆する。

結論として、SC1kpは測定時間が短く簡便性に優れ、スポーツ現場において静的筋力評価を補完する有用な評価手段である。特に高速度パワーが重要な競技におけるトレーニング効果のモニタリングや選手の速度能力評価に適している。ただし、体重で正規化しなかった場合の値は体重の影響を受けるため、体格差のある選手間の比較には慎重な検討が必要である。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-A-05] 足袋型シューズの2ヶ月間の装着が瞬発力とアジリティに及ぼす効果 (コ)*天野 勝弘¹、森 克実²、田邊 真菜実³ (1. スポーツパフォーマンスデザイン、2. G5 sports、3. G5sports)

日本ではかつて鼻緒のついた履物が主流であった。現在でも特殊な分野では履き続けられているし、そこから派生した足袋型の履物、例えば地下足袋は今でも活用されている。さらに、カジュアル、スポーツ、足の機能改善を目的とした足袋型シューズ (TabiS) が開発・展開されている。私たちはこれまでTabiSの効果についての報告を行ってきた (2018、2019体育学会、2020愛知大学紀要、2021東京体育学会)。しかしスポーツ用のTabiSを一定期間履き続けることによる身体機能の向上に関する研究は行っていなかった。スポーツ競技の現場においては、このエビデンスは重要であると考え、そこで本研究ではこの点について、瞬発力およびアジリティ能力におよぼす効果を検証することを目的とした。使用したTabiSは株式会社丸五製のスポーツジョグIIであった。対照群は普段履いているシューズで活動した。介入期間は2025年1月7日～3月2日であった。シューズの使用は練習日の6日以上を着用を指示した。介入の前後でカウンタームーブメントジャンプ (CMJ) の跳躍高、ピーク速度、ピークパワー、ドロップジャンプ (DJ) の反応筋力指数 (RSI) をenode (S&C社) により測定した。また10m走、プロアジリティのタイムを光電管を用いて測定した。被検者は直近の甲子園出場をしたチームの野球部員37名 (実験群25名、対照群12名) であった。実験群ではCMJのピーク速度が2.64m/秒から2.78m/秒に、ピークパワーは3735Wから4208Wへといずれも有意に向上した。DJのRSIも2.13から2.28に有意に向上した。一方対照群では、DJのRSIのみ2.02から2.24に有意に向上していた。跳躍高は両群とも有意な向上は認められなかった。以上のことからスポーツ用TabiSは瞬発力とアジリティを向上させる効果があると考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[1a402-04] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表②

座長:森嶋 琢真(中京大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-A-06] 日常での草履サンダル着用が少年野球選手に与える影響（測、コ）

*宮口 和義¹、畠本 紗斗子²、坂口 雄介³、川端 健司³、宮口 貴義⁴ (1. 石川県立大学、2. 金沢工業大学、3. 北陸大学、4. 金沢大学大学院)

近年、子どもたちの足部機能や姿勢保持機能の低下が、運動能力やスポーツパフォーマンスに影響を及ぼしていることが指摘されている。特に成長期にある少年野球選手においては、足部の機能的発達が全身の運動連鎖やケガの予防に密接に関わっており、適切な足部機能の育成の重要性が報告されている。こうした背景のもと、伝統的な履物である草履サンダル（以下、草履）が注目を集めている。草履は足指を積極的に使う構造を持ち、足底筋群や足趾の巧緻性を自然に鍛える効果があるとされ、日常的な着用により、足部の筋活動やバランス能力が向上する可能性が示唆されている。少年野球は下肢を中心とした全身運動を伴う競技であり、投球・打撃・走塁といった基本動作は、安定した足部支持と敏捷性を基盤としている。そのため、足部機能の向上が競技能力に好影響を与える可能性がある。そこで本研究では、少年野球選手を対象に、日常生活における草履着用が足部機能および運動能力に与える影響を明らかにすることを目的とした。対象は、少年野球2チームに所属する小学4～6年生の男女児童36名であった。測定項目として、10mダッシュ、立ち幅跳び、投球速度、バットスイング速度、足圧分布、および足趾把持力を測定した。足趾把持力（特に右足趾）と、バットスイング速度（ $r=0.65$ ）、投球速度（ $r=0.60$ ）、立ち幅跳び（ $r=0.48$ ）の間に中程度の相関が認められた。草履導入から半年後に再測定を行った結果、足圧分布に有意な前方変移（踵荷重から前足荷重への移行）が認められた。また、足趾把持力、立ち幅跳び、投球速度、バットスイング速度に有意な向上が認められた。一方、10mダッシュにおいては有意な差は認められなかった。日常生活に導入するだけの簡便なコンディショニングではあるが、競技力の向上および将来的な障害予防への貢献が期待される。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-01]

競技会参加の目的とチームのあり方について (コ)

大学体操競技部における例をもとに

*松山 尚道¹ (1. 天理大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-02]

スポーツチームで実施するメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発 (心)

スポーツ現場へのメンタルヘルス教育導入に向けて

*小塩 靖崇^{1,2} (1. 国立精神・神経医療研究センター、2. 東京大学大学院総合文化研究科)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-03]

チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討 (哲)

*大友 一樹¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-01] 競技会参加の目的とチームのあり方について (コ)

大学体操競技部における例をもとに

*松山 尚道¹ (1. 天理大学)

現代日本のありとあらゆる現場において「多様性」というキーワードのもとに、個人の尊重が叫ばれていることは今更強調するまでもないといえる。一方で競技スポーツの現場では、すべての選手に均等に出場機会が与えられるわけではない。大学部活動においては、競技会に出場できない選手が競技役員などで運営に回ることでその競技活動が成立しているというのも現実として受け止めなければならないだろう。部内予選などを勝ち抜いて競技会に出場権を得るためにはそれ相応の努力が必要であり、その結果の権利であることは言うまでもない。しかしながらその背景には権利を獲得できず、応援や運営サポートに回る選手も存在している。場合によってはその際の経費は自己負担であることも少なくないのではないか。出場権を勝ち得た選手は、部やチームを代表して出場するという形になり、その期待に沿った立ち振る舞いが求められるであろう。しかしながらやはり個人としての目標達成に重点を置きたくなる側面も否定できないといえる。このような際には、チームとしての規範意識を醸成させつつも、各選手の「個」を尊重させるためのバランスが重要になり、指導者等のスタッフがどのように導いていくのが非常に重要になるといえる。本発表では、大学体操競技部における例をもとに、これまでの競技に対する考え方やオフ期のトレーニング段階から競技会までの取り組み方、限られた出場権を得た後に選手がどのような想定で競技会に臨もうとしていたのかといった点に着目し、そのあり方について検討する。そこでは選手の技術向上とそれに伴ったモチベーションの高まり、一方で現代の多様な価値観の中でチームのために「個」を抑えなければならない葛藤といった様々な視点の中で、指導者が選手にどう関わっていたのかを見つめなおしていくものである。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-02] スポーツチームで実施するメンタルヘルスリテラシー教育プログラムの開発 (心)

スポーツ現場へのメンタルヘルス教育導入に向けて

*小塩 靖崇^{1,2} (1. 国立精神・神経医療研究センター、2. 東京大学大学院総合文化研究科)

【目的】アスリートや指導者に対するメンタルヘルスサポートの必要性が高まる一方で、体系的な教育機会の不足が課題である。本研究では、IOCが公開した「Mental Health in Elite Athletes Toolkit」日本語版を活用し、国内スポーツチームにおいて実施可能なメンタルヘルスリテラシー教育プログラムを開発・導入し、その効果を探索的に検討することを目的とした。【方法】スポーツチームを対象に、メンタルヘルス研修を受けたアスリートとメンタルヘルス専門家が協働で訪問型セッションを実施した。プログラムは「試合時のメンタルの整え方」「心の健康とパフォーマンス」「セルフケアと相談行動の促進」などで構成し、視聴覚教材も併用した。事前・事後・フォローアップにおいて、競争的環境における心理的安全性 (SPSI)、メンタルヘルスリテラシー (MHL)、相談意向などを効果指標とした。【結果】本プログラムは、アスリートが自身の心の状態を言語化し、相談行動を促すことを目的に構成された。現時点では11名を対象とした暫定的な事前・事後比較を実施し、SPSIスコアは22.6から29.5 ($p < 0.001$)、MHLスコアは30.1から36.6 ($p < 0.001$) へと有意な向上が確認された。これらの結果は初期データに基づくものであり、発表当日には、対象者数を増やした上で改めて結果を報告する予定である。【結論】本プログラムは、アスリート主体の学びを促す実践的教育モデルとしての有効性を示唆している。今後は、対象チームや参加者の拡大、指導者を含めた包括的な展開、長期効果の検証が課題であり、より大規模かつ継続的な実践と検証を通じて、本プログラムの有用性と汎用性を明らかにする必要がある。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長:谷釜 尋徳(東洋大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-03] チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討（哲）*大友 一樹¹ (1. 筑波大学大学院)

各中央競技団体はプロ選手や日本代表を目指す中高生アスリートに対する取り組みとして、一貫指導の観点から指導方針を作成している。指導方針では、中高生指導に対する理念として「育成」と「強化」が重視されている。日本バスケットボール協会を例に挙げれば、「育成」は主に選手個人の技術や身体能力を向上させること、そして「強化」はチームとして勝利を目指すことであると定義されている。しかしバスケットボールをはじめとするチームスポーツにおいて、コーチが選手たちに身体的な優位さに頼ったプレイをさせる状況はよく見られる。つまり、勝利のみが目指され、選手個人の「育成」が十分に行われていないのである。ここで「育成」と「強化」の定義に目を向ければ、内山が指摘しているように技術の獲得や向上は勝利という目標の実現に向けて行われるのであり、「育成」で行われることは「強化」としてそのまま言い換えることができる。つまり、勝利追求によって「育成」も実現することができてしまう定義は問題がある。では、「育成」と「強化」をどのように捉え直すべきであろうか。5種目の中央競技団体の指導方針では、「育成」と「強化」の対象が不明であり、かつ「強化」では勝利を目指すための取組が具体化されていないことに問題がある。そこで筆者は「育成」がすべての選手を対象とした、卓越性の向上であり、さらに「強化」がすべての選手を対象とした卓越性の発揮であると捉える。「育成」では目の前の試合での勝敗にかかわらず新たな技術や身体能力を習得、向上させ、「強化」では戦術選択や選手起用によって、選手の卓越性をより強め、発揮させる。新たに捉えられた「育成」と「強化」はどちらも練習、試合において行われるものであり、すべての年齢を対象とする。そして「育成」と「強化」は、繰り返し実践されることが望ましい。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-04]

福岡県タレント発掘事業における運営システムの構築（政）
事業運営者の動向を中心に

*井上 雄貴¹ (1. 日本体育大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-05]

小中学生期を対象とするタレント発掘・育成事業における育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（アスリート育成パスウェイ）
福岡県及び山口県の事例から

*白井 克佳^{1,2}、山下 修平^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、原村 未来³、山口 真未^{1,2}、萩原 正大^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-06]

スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（社,コ,政）
シンガポールにおける事業の品質管理とリスク管理の事例から

*小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、山下 修平^{1,2}、原村 未来³、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏠 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:30 ~ 15:50

[競技スポーツ-B-04] 福岡県タレント発掘事業における運営システムの構築（政）
事業運営者の動向を中心に*井上 雄貴¹ (1. 日本体育大学)

近年、多くの先進国では、オリンピック競技大会などの国際競技大会を見据えた国際競技力向上への取り組みが推進されている（日比野，2018）。その施策のひとつとしては、タレント発掘・育成（Talent Identification & Development以下「TID」と略す）プログラムがあげられる。TIDプログラムは、優れた素質を有する人材を発掘・育成し、より多くのトップアスリートの世界に輩出していくプログラムである。日本で実施されるTIDプログラムは、競技団体、国、そして地方自治体におけるプログラムの3つに分類される。日本におけるTIDプログラムは、2004年に始まった福岡県タレント発掘事業以降、全国的に拡がりをみせている。

従前の研究は、優れた素質を有する人材を見過ごさないように発掘するために測定や評価の方法が模索され（関谷ほか，2018；池田ほか，2022）、世界で活躍するトップアスリートへと育成するために運動能力の特性や評価基準などが明らかにされてきた（中尾ほか，2014；谷所ほか，2017）。そのなかで、TID事業の品質の維持・向上には事業実施主体の中核スタッフの質や体制が大きく影響を及ぼすと指摘しているが（阿部ほか，2009）、地域TID事業スタッフらがどのような事業運営を展開しているのかについて明らかにされていない。

そこで、本発表では、なぜ福岡県はTID事業を実施するに至ったのか。事業運営者らが福岡県タレント発掘事業を実施する際にどのような障壁があり、その障壁を如何に乗り越えたのか。これらを福岡県タレント発掘事業の事業運営者らに行なったインタビュー調査をもとに分析し考察する。そして、地域TID事業の中心的モデルといわれる福岡県タレント発掘事業がどのように事業の基盤を築いたのか検討する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

15:50 ~ 16:10

[競技スポーツ-B-05] 小中学生期を対象とするタレント発掘・育成事業における育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（アスリート育成パスウェイ）
福岡県及び山口県の事例から

*白井 克佳^{1,2}、山下 修平^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、原村 未来³、山口 真未^{1,2}、萩原 正大^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

日本の地方自治体が主体となって実施するタレント発掘・育成事業（以下、地域TID）は、2004年に福岡県で開始されて以降、全国各地に展開されている。地域TIDの主な手法は、個人の適性に応じたスポーツを模索する種目適性型、特定のスポーツにおいて適性を見出し選抜する種目特化型、あるスポーツのアスリートが、自身の特性を活かすことのできる別のスポーツに変わる種目最適化型、の大きく3種類が展開されている。これらの取り組みからは、東京2020大会（11名）、パリ2024大会（13名）、北京2022大会（5名）など、国際大会に日本代表選手を輩出する成果が確認されつつある。しかし、地域TIDでは、アスリートの発掘時期や競技選択のタイミング、育成プログラムの時間・頻度と日常トレーニングの妥当性などのエビデンスが不足しているのが現状であり、トレーニング量と傷害のリスクを考慮したプログラム構築や地域TID修了時の競技継続の支援体制に課題があることが指摘されている。特に、ジュニアからシニアへの移行期はアスリートキャリアの中でも最も困難な時期であり、その支援体制の整備が求められている。そこで本研究では、地域TIDにおいて多くの国際大会出場選手を輩出し、かつ事業継続年数15年以上の福岡県および山口県を我が国の先行的な好事例と位置づけ、それぞれの地域TID関係者に対して、事業評価や育成プログラム及び支援体制の構築に関する内容の半構造化インタビューを実施した。そして、抽出された課題や事業の促進要因を実証的に示すことで、他の地域TIDにも応用可能な効果的かつ効率的な事業支援策を検討することを目的とした。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[1a601-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:須甲 理生(日本女子体育大学)

16:10 ~ 16:30

[競技スポーツ-B-06] スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究 (社,コ,政)

シンガポールにおける事業の品質管理とリスク管理の事例から

*小野寺 峻一^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、山下 修平^{1,2}、原村 未来³、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

オリンピックや世界選手権大会などの国際的なスポーツイベントでは、国家的支援を受けたスポーツ強豪国がメダル獲得を目指して熾烈な争いが行われ、しばしば「The Global Sporting Arms Race」と評されている。こうした競争の中で、各国は自国の社会的・文化的文脈に応じたアスリート育成パスウェイの構築を進めている。アスリートが国際舞台で成果を収めるためには、スポーツタレントの発掘・育成に関する事業（タレント発掘・育成事業）の卓越性と効率性がより一層求められている。

このような事業運営の卓越性と効率性を支える要素として、品質管理とリスク管理が挙げられる。品質管理は、サービス・人材・プロセス・環境等の質を継続的に向上させることにより、組織の競争力と持続可能性を高めるものである。リスク管理は、事業の目標達成を妨げる潜在的な要因を特定し、それを軽減・排除するための体系的な取り組みである。こうした視点に基づくマネジメントは、アスリート育成の長期的成功において不可欠であると考えられる。

しかし、日本を含む多くの国々では、タレント発掘・育成事業における検証は限定的であり、とりわけ事業が直面する課題と、それを克服するためのプロセスに関する知見は乏しい。したがって、継続的かつ長期的にタレント発掘・育成事業を行っている諸外国の事例を詳細に分析することは、我が国の事業推進に役立つ可能性がある。

そこで本研究では、2004年に設立されたスポーツスクールを中心に、国を挙げて長期的なタレント発掘・育成事業を推進するシンガポールを先行事例として取り上げる。具体的には、アスリート育成に包括的に取り組む同国の政府系スポーツ組織の関係者に対して半構造化インタビューを実施し、品質管理とリスク管理の視点から、事業の課題と促進要因を明らかにすることを目的とする。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-01]

「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異（教）

*中村 有希^{1,2}、梅澤 秋久³ (1. 九州共立大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 横浜国立大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-02]

インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教,ア）

*萩原 大河¹ (1. 姫路市立水上小学校)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-03]

文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業におけるCulturally Responsive Teachingに関するシステムティック・レビュー（教）

*戸村 貴史¹ (1. 福山大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-01] 「良質な体育」と学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異（教）

*中村 有希^{1,2}、梅澤 秋久³ (1. 九州共立大学、2. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、3. 横浜国立大学)

体育は身体活動を伴う教育であり、子どもの怪我や事故のリスクは少なからず存在する。日本スポーツ振興センター（2024）によると、各教科等で起きる負傷件数のうち、体育は小学校で71,081件（82.3%）、中学校で70,152件（94.1%）、高等学校で45,988件（95.8%）と報告されており、各教科等の事故は約8割～9割が体育で起きている。したがって、体育の安全をめぐる問題は、体育科教育学分野において長年にわたり指摘されてきた課題でもある。実際に、UNESCO（2015）が提唱する「良質な体育（Quality Physical Education）」では、「子どもの安全・保護」、「身体リテラシー」、「包摂・共生」（梅澤訳，2020）の3つが主要な要素であるとされており、体育の安全は「良質な体育」を保障する中核に位置づいている。

他方、文部科学省（2021）は「令和の日本型学校教育」において、子ども個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子どもが自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整する「個別最適な学び」や「協働的な学び」の充実を求めている。体育においても、子どもが自身の状況に応じて主体的に運動に向かう学習や、子どもの個性や能力に応じて協働的に学習を進めていく教育が求められている。このような体育学習が求められる中、体育の安全をどのように保障していくのか、学習観の変容と併せて安全の在り方を問うていく必要があるだろう。

かかる問題意識から、本研究では、UNESCOの「良質な体育」と我が国の学習指導要領における体育の安全をめぐる解釈の差異を比較検討することを通して、「令和の日本型学校教育」における良質な体育の安全の在り方を検討するための基礎的知見を得る。詳細は、当日に報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-02] インクルーシブな体育授業における児童のアライシップ（教、ア）*萩原 大河¹ (1. 姫路市立水上小学校)

我が国では、共生の視点を踏まえたインクルーシブな体育授業が目指されている。その一方、障がいのある学習者が、通常の学級での体育授業において見学や得点係といった身体活動を伴わない形式で参加している事例がある（澤江，2020）。これは教材が障がいのないことを前提に構成されているという特権を孕んでいることに起因している可能性がある。つまり、障がいのある学習者は、通常の学級での体育授業においてマイノリティとしての処遇を受けているといえよう。

マイノリティに対して、「特権集団の人々の中で、自らの意思で非抑圧集団の人々の権利を支持する、あるいは社会公正を求めて立ち上がることを選択する人々」はアライと呼ばれる（グッドマン，2017）。インクルーシブな体育授業に当てはめれば、アライは、障がいがないという自覚を通して障がいのある学習者の抑圧を改善しようと働きかける通常の学級の学習者個人または集団と定義できよう。そこで本研究では、インクルーシブな体育授業における障がいのない児童のアライシップを明らかにすることを目的とした。

対象は小学校4年生の1クラス30名の児童であった。この内、1名は特別支援学級に在籍し、日常的に通常の学級で体育授業に参加していた。本研究では、キャッチセット・アタックプレルボール（岩田ほか，2011）を教材としたネット型ゲームの様子を観察した。発表者は授業者として携わり、授業中の出来事や児童の様子メモ、児童へのインタビュー等をもとにフィールドノーツを作成した。分析はフィールドノーツにグラウンデッド・セオリー・アプローチ（シャーマズ，2020）を施した。

結果、アライシップは共に学習することへの葛藤を起点としていた。その後、障がいの理解を深めることを通して共に学習することを追求し、障がいのある児童の学習参加に向けた行動として補助具を作成した。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[1a702-04] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表①

座長:横山 剛士(金沢大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-03] 文化的・言語的に多様な児童生徒を含む体育授業における Culturally Responsive Teachingに関するシステマティック・レビュー (教)*戸村 貴史¹ (1. 福山大学)

近年、教育現場では文化的・言語的に多様な児童生徒（CLD児童生徒）が増加し、教員には多様性に応じた包括的な指導力が求められている。なかでも体育は、スポーツ経験や健康観、服装、身体接触、コミュニケーションなど、学習者の文化的背景と深く関わる教科であり、文化的・言語的配慮が欠けると、学習における安全性や倫理性が損なわれるおそれがある。こうした課題に対応するうえで、CLD児童生徒の文化的背景を尊重し、それを学習内容や指導に反映させるCulturally Responsive Teaching（CRT）の実践が国際的に注目されている。今後、日本でもCLD児童生徒の増加が見込まれる中、CRTの専門性を備えた教員の育成は喫緊の課題である。国際的には体育におけるCRT研究が進展する一方、日本ではまだ端緒についた段階にある。そこで本研究では、体育におけるCLD児童生徒への指導に関する教員の経験や認識に着目した国際的研究を対象にシステマティック・レビューを行い、以下のリサーチクエッションに対する洞察を得ることを目的とした。①CLD児童生徒に対する体育指導において教員が経験する課題とは何か、②その課題に対応するために教員に求められるCRTの知識とスキルとは何か、③それらを教員が獲得するためにどのような教師教育が求められるか。文献はScopus、ERIC、EBSCO、ProQuestを用いて検索し、引用文献の追跡も行った。203件から重複を除いた155件をスクリーニングし、最終的に15件を分析対象とした。本研究は、体育におけるCRTの国際的知見を整理し、日本の多文化共生に資する示唆を提供する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04]

クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)
中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*齊藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05]

長距離走のICTを活用した集団的競争教材試案 (教)
チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06]

高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究 (発,測,教)

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04] クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)

中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*齊藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

本研究では中学校2年生の陸上競技短距離走の授業を対象とし、全5時間（内、測定2時間）の単元で、正しいクラウチングスタートの行い方を学習し、地面をしっかり押し力を伝えることを中心にクラウチングスタートの局面から加速局面までの指導を実施した。本研究の目的はクラウチングスタートとその直後の地面をしっかり押し力を伝える指導が中間疾走に与える影響を明らかにすることである。本研究の成果を明らかにするために、単元前後で実施した50m走の疾走能力の変化を検討することとした。検討する内容は、50m走タイムと疾走動作、調査紙調査によるクラウチングスタートの意識ポイントである。

一般的に短距離走を扱う体育の授業では疾走動作の変容を目指した指導を行い、タイムの向上を目指す授業が多くみられる。また、各局面を扱う場合はその局面ごとの動作に着目した指導を行うことが多い。本研究では、動作指導ではなく、短距離走全体に共通して求められる力を地面に伝えることを指導している。地面に力を伝えることが疾走全体にどのような影響を与えるのかを明らかにすることは、学校体育の指導において精一杯全力を出して結果もでる短距離授業を実現するための新しい視点を与えていると考えている。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05] 長距離走のICTを活用した集団的競争教材試案 (教)

チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

長距離走は体育における子どもたちが嫌う代表的な種目の一つである。そこで、本研究では「勝敗を競う楽しさや喜び」、皆が平等に学習を行ったうえで競争をするための「知識・技術」、勝敗を競う楽しさや喜びを得る過程で生じる「他者の受容や尊重」を学習内容とする長距離走教材を開発することを目的とした。研究方法として、まずスポーツ及び体育における競争の位置づけについて整理する。次に、長距離走の授業実践に関する先行研究について概観する。これらを踏まえ、研究目的に基づく長距離走教材の開発を試みる。研究の結果、まずスポーツにおける競争性については、競争は間接的・平和的でルールに規制されるものであり、他者や社会に対して利益となる社会的功利性の側面も有している。また、スポーツを運動材として扱う体育における競争性については、競争や比較による客観的結果から何を学び、次の努力への原動力としていくか、いかに自己完成に結びつけていくかという観点が重要になり、教材では全ての学習者に勝利する機会を平等に保障することが可能であることが求められる。そして、長距離走教材において競争性を位置づけていくには、自己に適した一定のペースでの走行を習得した上で、競争性を積極的に位置づけていくことで、学習者の長距離走授業に対する楽しさにより繋げていくことが可能となること、相互作用の変化に気づき、時々刻々と変化する環境（他者）に柔軟に対応する応答的身体を生み出すこと、個人が成果を得る過程において学習者間の連携や協力が生じることが考えられる。また、長距離走教材における競争の形態としては、学習者間の優劣が現前しにくく、また競争に向けた準備の過程でも集団内での協同が生まれやすくなるため、個人間での競争のみならず、集団による競争の観点も必要である。これらのことから、本研究では、チームパシュート型ペース走の教材試案について提起する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06] 高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究（発,測,教）

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

本研究は、高校入学年次の柔道授業において、映像分析ツール「SPLYZA Teams」を活用したICT導入による「分析」を通じて、生徒が自己や他者の動きを言語化し、対話的に学びを深めるプロセスを明らかにすることを目的とした。近年、体育授業においてもデジタルツールの導入による学習効果の向上が期待されている。特に、高校1年次は、生徒にとって新たな学習環境や人間関係に適応する重要な時期であり、対話的で協働的な学びの基盤を形成する絶好の機会である。柔道は身体接触を伴う競技であり、安全配慮とともに相互理解や状況把握が求められるが、実技中心の指導では自己や他者の動きを言語化し共有する機会が限定されがちである。そこで、柔道の実践場面を可視化・分析・共有することで、生徒が自他の動きを客観的に捉え、運動の言語化や他者との対話を促進し、自己理解・他者理解を深める新たな学びの形を模索することが重要であると考えた。柔道の選択授業（計14時間）では、生徒が「タグ付け」や「描き込み」を使って、自身や他者の技の映像を分析・共有する学習活動を実施した。教師は「授業取り上げタグ」を使つて的確な視点での描き込みについて共有・評価した。アンケートや自由記述から、分析活動が自己理解・他者理解を促進し、技術向上や学習意欲につながっていることが明らかとなった。また、言語化されたフィードバックを通じて生徒間のコミュニケーションが活性化し、柔道の学習が一方通行でなく協働的なプロセスとして構築されていた点が注目される。本実践は、柔道という伝統的かつ個別性の強い実技領域において、ICTを用いた「分析」と「対話的学習」を有機的に結びつけた点に新規性がある。運動の可視化・言語化を通じて、生徒の思考力や表現力を育成し、主体的・対話的な学びを実現する実践は、今後の体育科教育におけるICT活用モデルとなることが期待される。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-01]

エージェンシー概念の実践化プロセスの解明 (教,政)

中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*草津 晃平¹ (1. 唐津市立伊岐佐小学校)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-02]

定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果 (教)

*五十川 利心¹、浜上 洋平²、栗田 昇平² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-03]

共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究 (ア)

*綿引 清勝^{1,2} (1. 東海大学児童教育学部、2. 明星大学大学院教育学研究科)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-B-01] エージェンシー概念の実践化プロセスの解明（教,政）
中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*草津 晃平¹ (1. 唐津市立伊岐佐小学校)

OECD “Education 2030”で提唱された「エージェンシー」は、未来を見据えた学びの方向性として衆目を集めている。だが、体育の授業においてその概念がどれほど実現されているかについては、現場レベルでの導入には依然として困難が伴っている。本研究では、中学校保健体育におけるエージェンシーの実践化プロセスを明らかにすることを目的に、同概念に初めて触れた3名の教師に対し半構造化インタビューを行い、SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて質的分析を行った。

その結果、教師たちは共通して、①エージェンシーを抽象的かつ難解なものと捉えながらも、②既存の実践と接続可能な点（AARサイクル、役割分担、権限の譲渡、振り返り等）を手がかりに導入を試み、③一部の生徒における変容を通じてその意義を実感していた。さらに、教師自身も授業実践を「言語化」する過程で、エージェンシーの再解釈と授業構成の再設計に至るなど、受容・適用・再構成のプロセスを歩んでいた。

本研究は、教育概念の実装において「教師自身の納得解の獲得」や「既存実践との媒介的接続」が重要であることを示唆する。今後は、教師の現場知を尊重しつつ、教育概念の「翻訳」と「内在化」を支援する仕組みの構築が求められるだろう。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
かに貢献できるか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-B-02] 定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果 (教)

*五十川 利心¹、浜上 洋平²、栗田 昇平² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

協同学習とは、協同的な相互依存性の学習状況への促進作用を利用することを意図した指導法であり(栗田、2015)、小グループを活用して自分と他者の学びを高めるものである(ジョンソンほか、2010)。協同学習モデルを適用した体育授業では、運動・認知領域に加え、特に情意・社会的領域への効果が高く、安定して機能するとされる(栗田・大西、2023)。

定時制高等学校(以下、定時制高校)は、勤労青年のみならず、中途退学者や不登校経験者、発達障害等の特別支援が必要な生徒など、多様な学習ニーズに応じた教育機関としての役割を担っている(文部科学省、2020)。学び直しや自立支援が期待される一方で、定時制高校の生徒はコミュニケーションスキルに不安を抱え、対人恐怖心性を持つことが指摘されている(堀田ら、2017)。

対人関係に課題がある定時制高校の生徒に対して、情意・社会的能力を育む協同学習モデルを体育授業に導入することは有益である可能性が高い。しかし、体育授業における協同学習の実践研究は多くが小学校段階を対象にしたものであり、中学校以降の校種、特に定時制高校での実践は少ない。

そこで本研究は、ある地域の定時制高校2年生10名(男子6名、女子4名)を対象に、協同学習モデルを適用した7単位時間のハンドボールを素材とした球技領域・ゴール型の授業を実施し、その効果検証を目的とした。授業は保健体育科の教員3名(男性2名、女性1名)によるチームティーチングにて行われた。

データは①形成的授業評価法(高橋ほか、2003)、②主張的・認知的共感性尺度(倉盛、1999)、③学級適応感尺度(江村・大久保、2012)の質問紙調査から得た量的なものに加え、④授業者、生徒に対する半構造化インタビュー、⑤フィールドノート、⑥授業映像による質的なものを収集し、それぞれの分析結果をもとに複合的に考察した。結果等の詳細は発表時に示す。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

座長:高橋 浩二(長崎大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-B-03] 共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究 (ア)

*綿引 清勝^{1,2} (1. 東海大学児童教育学部、2. 明星大学大学院教育学研究科)

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説保健体育編体育編（2018）では、改訂の要点として「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する視点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること」と示されており、共生社会の実現へ向けた保健体育科の果たすべき役割として、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が含まれている。ここでは、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が例示されていることも注目すべき事柄だと言えるが、共生社会の実現へ向けて、学校体育の果たすべき役割は大きい。そこで本研究では、多様な児童生徒が共に学び共に育つインクルーシブ体育の実現へ向けて、多様な学習者が相互に学び合い、観点別評価にも応用可能な体育授業の自己評価尺度を開発することを目的とした。

研究方法は、202x年1月～2月の期間において、A県の高等学校2校の生徒（N=414）を対象に梅澤・村瀬・坂本（2021）などの先行研究を基に作成した30項目について5件法（5：当てはまる、4：やや当てはまる、3：どちらともいえない、2：あまり当てはまらない、1：当てはまらない）による質問紙調査を実施し、回答を得た。分析方法は、探索的因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した結果、合計2因子が抽出された。これらの因子は、第一因子（ $\alpha=.958$ ）を「共に学ぶ因子」、第二因子（ $\alpha=.947$ ）を「共に育つ因子」と命名した。次に、抽出された2因子についてMann-WhitneyのU検定にて両校の得点を比較した結果、0.1%水準で通常の高等学校よりもインクルーシブ推進校の方が有意に高い傾向が確認された。なお、本研究は明星大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。